

KIBO NO NIJI きぼりの虹

春号

発行所
北海道大学生協同組合
札幌市北区北8条西7丁目
教職員委員会編集
電話 011-746-6218

主な記事紹介

- 二面・三面 ニホンザルこぼれ話 第17話
- 四面 心とからだ健康を考える 最終回
- 七面 大学文書館へ行く 第27回

Ezoli n i K. 風張 喜子
地域個性研究会
教育学部 非常勤講師 渡邊 誠
北海道文書館学井上 高聡



私は共同研究型インターンシップに参加し、北部食堂の課題解決に取り組んだ。

昼休み開始と同時にできる長い行列を目にし、「この混雑は本当に避けられないのだろうか」という疑問を抱いたことが出発点である。この課題をデータや仕組みの力で解決できないかと考え、本インターンシップに応募した。DXへの関心に加え、多くの学生が利用する食堂をより快適な場所にしたという思いが、挑戦を後押しした。

食堂の現状を整理する中で、特に気になったのは二点だ。昼の混雑が短時間に集中していることと、主菜に比べて小鉢があまり選ばれていないことである。前者は行列と待ち時間の増加につながり、後者は食事が偏りやすくなる点が課題だ。大学生活を支える食堂だからこそ、利便性の向上だけでなく、バランスの取れた食事を選びやすい環境づくりも重要であると捉えた。

まず混雑については、レジ取引データを時間帯ごとに集計し、利用者数の推移を可視化した。その結果、混雑のピークは11時55分から12時15分に集中していることが明らかになった。一方、12時15分を過ぎると行列は急速に短くな

る。しかし、この情報は十分に共有されていないと考えられた。そのため多くの学生が「早く行かなければ混む」と判断し、利用時間が集中している可能性がある。

そこで、混雑を「予測し、可視化し、伝える」仕組みを提案した。実際にレジ取引データを用いて機

データで混雑を見える化する — 食堂DXへの挑戦 —

北海道大学大学院 工学院
北方圏環境政策工学専攻
修士課程2年
山田 愛

Opinion!



械学習モデルを構築し、過去の利用者数の推移から5分後の混雑人数を予測した。学習と検証を重ねた結果、短時間先の混雑状況を実用的な精度で推定できることを確認できた。その予測結果を色分けして表示すれば、混雑の見通しが直感的に伝わりやすくなった。「少し時間をずらせば空く」と分かれば、利用時間を調整するという選択肢が生まれる。情報が行動を支え、混雑の自然な分散につながることを目指した。

一方、小鉢があまり選ばれていない点については、食堂内の動線に着目した。現場観察に加え、取り組みの一環としてカメラを設置し人流を記録した。その結果、メインディスプレイや麺類を受け取った後に流れが滞り、小鉢コーナーへ自然に向かにくい配置になっていることが分かった。そこで動線を見直し、小鉢コーナーに立ち寄りやすい流れをつくる改善案を提案した。空間の使われ方を少し整えるだけでも、利用者の選択は変わり得る。

今回の経験を通じて、DXとは単なるデジタル化ではなく、人の行動や環境をより良い方向へ導く仕組みを設計することであると実感した。初めての本格的なDXへの挑戦には戸惑いも多く、思うように進まない場面もあった。しかし、データに基づいて課題を捉え、試行錯誤を重ねながら解決策へと結び付けていくプロセスを体験できたことは、かけがえのない学びである。そして何より、身近な課題に対して自ら一歩踏み出し、挑戦できたこと自体が、自分にとって大きな成長につながった。

ニホンザル
こぼれ話

■第17話■

EzoLin-K・地域個体群研究会 風張 喜子

種を超えて、友好は伝わるか？
―サル顔の顔真似奮闘記―

みなさんは、人の表情を読
みとるの得意ですか？喜怒哀
楽がわかりやすい人、ちよっ
とわかりにくい人。たまに、
「笑顔だけど目の奥が笑ってな
い」なんて表現される人もい
ますよね(笑)。ちなみに、わ
たしはすぐに顔に出ちゃうタ
イプで、ポーカーフフェイスは
苦手です。

さて、下の写真のサルた
ち、どんな時の表情でしょ
う？笑っている？泣いてい



表情クイズ!答えは本文中。
ちなみに、我が夫君は全問不正解でした。

る？怒っている？上の写真は、
強いサルから攻撃されたり、
ちよっとけんか腰で近づかれ
たり、怒られそうな時の表情
です。この時に、「キッ……」
とか「キャキャキャ……」
と小さな悲鳴を上げること
もしばしばです。相手への恐怖
や、敵意がないことを表す服
従の表情だと考えられています。
ぱつと見、笑っているよ
うにも見えますか？わたした
ちヒトは、楽しい時以外にも
声をださない「スマイル」で、
他者との関係を良好に保つと
言われています。この笑顔、

かつては服従の表情から進化
したという説もありましたが、
最近では、遊んでいる時の
「楽しいー」を伝える表情から
進化したという説が有力です。
自分の笑顔の温かなルーツを
知り、わたしは少しほっこり
しました。ちなみに、ニホン
ザルも遊びの中で笑顔を見せ
ると言われ、ちよつと真ん中
の写真が、遊んでいる時によ
くみられる表情です。□をま
あるく開けているのが特徴で
す。

な表情でしょうか？答えは目を
見開いての威嚇の表情。サル
団子の場所とりなんかで、弱
いサルがうっとおしい動きを
したときにも、こんな顔で怒
ります。サルの表情を覚えた
この頃、威嚇の顔真似を練習
中の私に向かって、先輩研究
者が「全然怖くない。上の歯
を見せないのがポイントよ」
とお手本を見せてくれました。
以前ご紹介したように、サル
の声真似は本人返事をもらえ
ることもあります。声真似が
通用するのなら、顔真似がど
うか気になるというものです。

いじわるじいさん

選択的夫婦別姓について
の議論は、法務省の「法
制審議会答申」を契機に
30年も前から始まっている
らしい。制度化する機運も
あったが、現在は動きが
止まっている。この議論が
姓だけの問題ではないの
は、反対意見の中に、こ
れを家族制度の解体と
みなす声があることから
も明らかである▼様々な

団体による世論調査も行われてき
た。質問の仕方によって数字は変
わるが、全体では制度導入に賛成
が多いようだ。ただ高齢者層では
導入に慎重な割合が高い傾向があ
る▼折しも、友人が娘の結婚を前
にして浮かない顔をしていた。新家
庭は仕事の都合で娘の姓になると
いう。二人の合意なら問題はないの
では、と私は祝福したが、友人は、
結婚相手の親の胸中に思いをはせ
案じていた。その友人の気持ちも
分からないではない▼友人も私も家
制度廃止後の生まれだが、女に大
学は不要というような家父長制の
考えの下で育った。結婚後もそう、
特に親族が集う冠婚葬祭時には、
よく不快な場面に遭遇した。その
時、私はどうしたのか。思い返す
までもない。受け流し続けてきた
のだ▼抗議するより楽な我慢によっ
て、家父長制を支え続けてきたこ
とになる。30年来の課題である選
択的夫婦別姓を前に、来し方を振
り返りつつ、ようやく、実現させ
たいと熱く思う。(今日子)

一方で、友好的サインもあります。唇を突き出し気味にして、小刻みにパクパクさせる「リップスマッキング」です。これは、「敵意はないよ、仲良くしよう」という合図で、相手の



怖いと自然に出ちゃう?かすかな服従の表情。

ある日、わたしの行く手に群れが広がっていました。この群れのサルたち、とつても人に慣れていて、どんだん近づいても平然としています。群れの中を突っ切っていると、足元で1頭のオトナのメスが、ふとこちらを見上げました。威嚇の表情を覚えたてのわたし、彼女に向けてやってみました。するとどうでしょう。彼女は一瞬、かすかな服従の表情を見せ、小さな悲鳴を上げました。また別の時にも、人馴れした大きなオトナのオスに試してみました。やはり、かすかですが服従の表情を向けられたのでした。

緊張をほぐします。わたしの存在を気にするサルに向けて、敵意はないことを伝えようと、渾身のパクパクを披露したものの、残念なことに、不審な顔で凝視されるだけで終わりました。脅しは簡単に通用しても、人間からの「友好」を一朝夕に信じてもらうのは、難しいのかもしれない。

ちなみに、このリップスマッキング、オスがメスを交尾に誘うときにも使われます。この場合は、唇をパクパクさせながら、メスの顔を見つめて接近し、相手の直前で

くるっと踵を返して振り返る、という一連の動きとセットです。ある年の交尾期、いつも群れが沢筋の開けた場所に広がっていました。強いオス、そのそばに彼を頼りにするメスやコドモたち。遠巻き気味にその様子をうかがうオスたち、という具合です。群れのはずれにいるオスたちを観察していた時、研究仲間「誘われてるよ」と声をかけられ、そばにいたオスに目を向けると、リップスマッキングをしています。どうもその視線は、わたしに向けられているようです。この年は、春にほとんどのメスがアカンボウを産み、発情するメスがとても少ない静かな秋でした。交尾相手に恵まれないオスたちの中には、マスターベーションに耽る者も。こんな状況だったので、もしかすると「相手は誰でもいいから」と、不埒なお誘いを受けたのでしょうか。交尾に誘う一連の動きがセットではなかったため、彼がどんなつもりでわたしにリップス

マッキングを向けたのか、真相は数の中です。さて、いろんな顔真似を試してきましたが、実はいつもの群れのメンバーには試したことがありません。威嚇の真似なんかして嫌われたくないのもありますが、わたしとサルたちとの関係が、研究データに影響を及ぼさないようにするためです。でも、そういうえば、こんな出来事がある。交尾期のある日、オスに追いかけられたメスが、いっしょに観察していた男性研究者の後ろに逃げ込んできました。すると、それまでメスを追いまわしていたオスは、彼の直前で急ブレーキ！聞くと、メスたちはその秋、彼を盾がわりにすることを覚えたようです。秋の間じゅう群れと過ごしても、わたしはボディガードに指名されたことなど



唇を突き出して交尾に誘うオス。踵を返して振り返った瞬間。

ありません。メスたちに盾にされている、いえ、頼られている彼が、少しうらやましくもありました。

いつの間にか、観察者もサルたちの生活に組み込まれている。わたしたちは、透明な存在ではなかった。勝手に築いたつもりでいた「観察者と対象」という壁が、ガラガラと崩れていきます。「どんなに人馴れしていても、観察者の影響がないとは思えない」。先人の教えが身に沁みました。

心とからだ健康を考える

教育学部 非常勤講師

渡邊 誠



臨床心理学関係の授業で、すべての質問に答えず、ということをや腹巻なく実行するようにならぬ、と、本当に様々な質問が投げかけられるようになります。知識的な内容で自分が知らない場合は、文献を調べるというほどの余裕はないものの、インターネットで調べて「よくわからないのでAIさんに聞いてみました！」とことわって引用し、実践家としてのコメントを加えたりします。もつと心理的な問題に関する、時に個人的な質問に対しては、心理支援職としての精一杯を答えます。どれもすぐ難しい応用問題のようなものですから、授業で話す定石の知識だけでは答えようがありません。質問も返答も、基本的に文章。口頭だと質問は減多にならないのですが、書いてもらうとたくさん出てくるのです。質問と返答を読んだら、学生同士でざっくばらんに共有してもらいます。

こんな風にしていくと授業が、こころの健康と一緒に考える、という感じになってきます。心理的な問題に関して理解することが精神健康を増大することは、専門領域では知られていて、心理教育という名前が呼ばれています。心理支援の国家資格である公認心理師の職務の中にも、こころの健康に関する知識を広く国民の皆様にお伝えせよ、というのが入っています。知識：いや、それは単なる知識では不十分で、それが相手に届くためには「声」にならなくてはならない：そんなことを考えるようになりまし。実際、授業でも自分の声の出し方は意識して、受講者からも声についての言及が出てきます。

ここ二十年位、事故、犯罪、災害等で大切な人を亡くした方々の手記の類を常に読んでいます。聞く機会に、何度か恵まれました。でも、手記から伝わってくる途轍もないもの以上のなにかが、講演から伝わってくるという気があまりしないのです。それは手記が単なる文章ではなく、底なしの悲しみや激しい思慕や

こころの健康を考える 92

最終回 一こころの健康を考えるということ

血のにじむような意思にふるえる「声」だからなのだ、と思うようになりました。この「心の健康を考える」という連載も、読んでくださる方に「声」として届けようとするものだったのだな、と思います。

連載の始まりは、さりげないものでした。私が北大保健センターと学生相談室の専任カウンセラーだった時、ある学部で精神健康に関する講演を依頼され、その後、生協を担当されていた先生から依頼を受けたのでした。最初、五、六回で、というお話だったように思います。書き始めてしばらくすると、七、八回まで続けてほしいと言われました。そしてその後は：黙って次のページだけが伝えられるようになり：そして、あしかけ十七年が過ぎました。

中井久夫先生が精神科医について言った「永久にうぬぼれられない存在」という言葉は、そのまま心理専門職にもあてはまると思います。こころの健康にかかわる要因は、ほとんど無数だからです。この理屈で言うと、こころの健康は永遠に考え続けるもの、ということになりますね。そうなの、かもしれません。

読んでますと声をかけて下さった方、原稿の受け渡しを担当し、感想を言って下さった方、生協の方、メールで感想を伝えて下さった方に、感謝いたします。授業での質問や感想と同じようにそれらの声も「シンガロング singing」であり、それに支えられて私も「声」を発し続けられたのだと思います。読んでくださった方、この連載の継続を支えて下さった北大生協の方々にも、感謝いたします。

定年退職に伴い、私の話はこれで終わります。皆様と、いつかどこかで、またお会いできることを願っています。

本誌「きぼうの虹」の看板コーナーを長年、担ってきたのが渡邊誠先生による連載「心とからだ健康を考える」です。

多くの北海道大学の教職員・学生が、「きぼうの虹」といえばこの連載と名をあげるのを何度も聞いてきました。

本連載は、2009年11月の第1回から2026年4月の最終回まで、16年余にわたって本誌で連載いただきました。渡邊先生は、北海道大学大学院教育学研究員の教員として、また臨床心理学の実践家として、極めて多忙な日々を過ごされる傍ら、休むことなくこの連載を続けてくださいました。2009年当時、社会全体が徐々に多忙化しつつある中で、大学も例外ではなく学生も教職員もゆとりを失いつつある現状を、先生はいち早く危惧されていました。以来、睡眠の重要性やストレスとの向き合い方、さらには震災後の心のケア、そしてコロナ禍など、時代ごとの切実な課題に対して、常に専門知に基づいた、かつ温かな「声」としての言葉を届けてくださいました。本学の教職員にとつて、先生の言葉は単なる知識ではありませんでした。日々、教育や研究、大学業務の重圧にさらされる中で、先生が提唱された「自分のペースやリズムを大切に」という姿勢や、「ストレスのサイン（イエロー・サイン）に気づく」という具体的な助言は、多くの教職員を救い、健康な就業継続を支える大きな力になったことでしょう。連載最終回では、「こころの健康は永遠に考え続けるもの」、「この『心の健康を考える』という連載も、読んでくださる方に『声』として届けようとするものだったのかな」との記述がありました。先生の連載が多くのひとびとの記憶に残っているのは、この連載を通じて、「こころの健康を一緒に考えよう」という先生の「声」が読者に伝わっていたからではないかと思いました。

長きにわたるご連載を終えられるにあたり、これまでの多大なご貢献に対し、本学教職員・学生を代表しまして、心より深く感謝申し上げます。先生の言葉が、本連載を通じて、これからの北大を支える人々の健康と幸せの道標となることを願ってやみません。

2026年3月6日

北海道大学生生活協同組合教職員委員会 委員長 清水池義治

SDGs

連載 第12回

「再エネが増えるほど電力は不安定？その誤解と現実」

北海道大学SDGs事業推進部門 教授 加藤 悟



資源エネルギー庁によると、2024年度供給計画による日本の発電構成は、火力発電が約65.0%、再生可能エネルギー（再エネ）が26.6%であった。原子力発電の割合は8.2%である。

電力ネットワークごとの地域別発電電力量では、北海道エリアの再エネ比率が44%と国内トップである一方、火力発電は56%を占めている。九州エリアでは再エネ比率が27%であるが、原子力発電が30%あるため、火力発電の割合は43%にとどまっている。

九州エリアでは、太陽光発電の比率が高く、時間帯によって電力需要に対して供給が過剰となるケースが増加している。その結果、電力需給のバランスを保つために、再エネの発電停止となる「出力制御」が行われている。環境エネルギー政策研究所によれば、2023年度の九州エリアにおける出力抑制率は約8.9%であり、再エネ発電の1割弱が活用されずに失われていることになる。

九州エリアで再エネ導入をさらに進めるには、いくつかの対策が考えられる。第一に、本州への送電を拡大するため、広域連携を強化することである。第二に、揚水発電の最大活用や大規模蓄電池の導入、発電調整がしやすいガス火力へのシフトなど、調整力の拡大が必要になる。最後に、太陽光発電への依存度を下げ、風力や地熱などの再エネの電源構成を最適化することも重要である。

余剰電力を利用して水を電気分解し、水素として貯蔵する方法もあるが、水電解・貯蔵・発電過程で少なくとも50%程度のエネルギーロスが生じるため、再エネ調整用としては効率的とは言い難い。むしろ、水素製造を目的とした洋上風力発電の専用設備として検討する方が現実的であろう。

北海道に目を向けると、泊原3号機が稼働した場合、原子力発電が道内の年間電力需要の約20%を賄う計算となる。再エネ比率は約40%であるため、火力発電は約40%となり、現在の九州と同様の構造になる。すると、春や秋は電力需要が低いため、供給過多から出力制御が増える可能性が高い。そうなれば、九州と同様に、本州との広域連携の強化、大規模蓄電池の導入、ガス火力への転換、地熱や洋上風力へのシフトなどが必要になる。

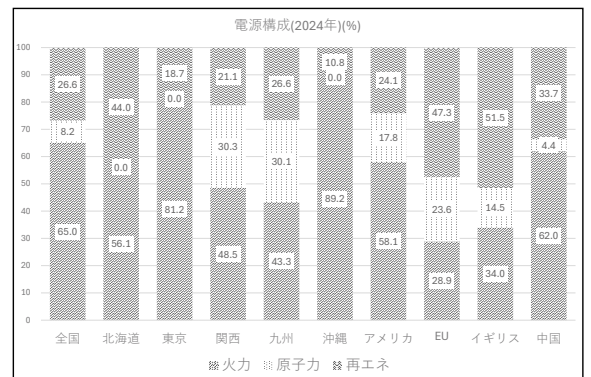
さらに、このような電力構造のもとでは、消費者側の行動変容も進む。家庭の電力使用パターンは変わらなくても、EVの充放電タイミングや、自動化工場の稼働時間帯の調整、蓄熱（冷熱・温熱）設備の導入などが広がっていくと考えられる。

これを支える仕組みが、時間帯別料金制度や市場設計の整備である。ヨーロッパでは再エネ比率が高く、火力発電比率はEU全体で29%まで低下している。このため、時間帯別料金が一般化しており、EUでは2025年から15分単位での価格決定が導入されている。あわせて、国境をまたぐ市場統合（Market Coupling）が進み、発電余剰国から不足国へ自由に電力が流れる仕組みにより、価格の急激な変動を抑えている。

イギリスでも火力発電比率は34%と低く、風力発電が北部スコットランドに集中する一方、需要はロンドンなど南部に多い。このためシステムの脆弱性から発電抑制が生じていた。イギリス政府は、地域別価格（北部安価・南部高価）の導入を断念し、全国一律価格を維持したうえで、広域送電網の強化を進めている。

北海道もイギリスと同様の構造を有しており、道北・道東で電力価格を低くし、札幌圏を高くする地域料金も一案ではある。しかし同時に、道内送電網の幹線強化と本州との連系線増強を着実に進めることが不可欠である。

結局のところ、再エネの拡大は今後も不可避であり、それに合わせて時間帯別・地域別の料金体系、道内および本州との送電網整備、電源ポートフォリオの調整を同時に進めていく必要がある。



クラーク書籍便り Vol.26

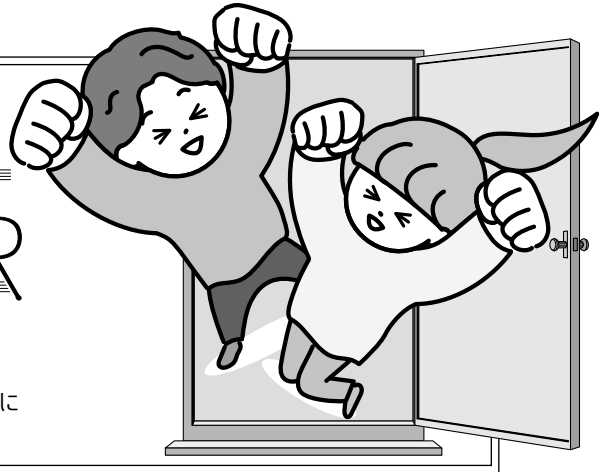
『生活史の方法』は聞き取り調査の第一人者が「他者の話を聞く」ことについて書いた本、但しhow toものに非ず、聞き取りの文章化のおもしろさ、むずかしさ、その暴力性まで、これまでの考えをまとめた新書。そして同著者の最新刊は『北海道の生活史』、150人の「ふつう」の北海道人に150人が聞いた大部なインタビュー集です。

クラーク1,2月一般書ランキング

順位	書名	著者名	出版社	順位	書名	著者名	出版社
1	TOEIC L&Rテスト 文法問題でる1000問	TEX加藤	アスク出版	6	国宝 下	吉田修一	朝日新聞出版
2	ポケット六法 令和8年版	森田宏樹	有斐閣	7	思考の整理学	外山滋比古	筑摩書房
3	言語化するための小説思考	小川哲	講談社	8	ナショナリズムとは何か	中井遼	中央公論新社
4	刑法論述ハンドブック 1	大塚裕史	弘文堂	9	ユダヤ人の歴史	鶴見太郎	中央公論新社
5	生活史の方法	岸政彦	筑摩書房	10	たとえば「自由」はリバイテイク	渡辺浩 (政治学)	岩波書店

院生 NEXTDOOR

第2回



北大生のおよそ3人に1人が大学院生。
「院生の生活ってどんな感じ?」「どんな研究をしているの?」
身近にいるけど、実はあまり知らない院生のリアルを、現役の院生に
紹介してもらいました。あなたの身近な院生が登場するかも…?

農学院

北海道は面白い、院生生活はもっと面白い

北海道大学大学院 農学院 食料農業市場学研究室 修士課程 1年 佐藤 野乃佳



5月の桜と10月の雪、真夏の朝4時の青空、北海道は面白い。でも、院生生活はもっと面白い。学部時代を他大学の
他学部で過ごし、大学院から北大農業経済に飛び込んできた私にとって、ここでの生活は初めての連続だ。札幌で一
人暮らしを始め、北大生になり、農学部内の研究室には自分の席があり、大学に行けば院生仲間が沢山いる。自分の周
りの360°全ての景色が変わったこの1年間は、こんなの初めて!と何度口にしたか分からない。

院生生活で私が力を入れているものの一つに「自主ゼミ」がある。そこには研究室の先生方の姿はなく、院生のみが
集まり、経済学・市場学・社会学などに関する本を輪読する。今年度の後期は、マックス・ヴェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資
本主義の精神』を読んでいる。文章を読むのが遅い私にとって古典は難解で、毎週50ページ読むのに4時間もかかる。しかし、自分が何度
読んでも理解出来なかった一文の意味が議論を通して分かったとき、なるほど!と思わず声が出てしまうその瞬間の喜びは何にも変えられ
ない。学部生までの私は、本を読んでも、分からない悔しさで頭を抱えたことはなかったし、分かった喜びで歓声を上げたこともなかった。文
字で心が動く、そんな時間と空間を共有できる自主ゼミが私は好きだ。

また、研究室のシンポジウムにおける論文検討では、報告に対してコメントが割り当てられる。農業経済学の初学者である上に、学
部時代はゼミでまともに発言したことのない私は、このコメントが本当に苦手だった。報告を聴いて疑問点を質問すれば良いのだが、何
が分からないのかすら分からず言語化が出来ない。しかし最近では、まだ拙い内容ではあるものの、質問やコメントに少し自信が持てるようになった。良いコメントだったと
先生や先輩に褒めてもらえた日は本当に嬉しく、更に努力する原動力になっている。

初心忘るべからずという言葉があるが、私にとってその初心は今である。今年初めてだった全てのことに、いつかは慣れてしまうし、嫌になる日も来るかも知れない。
それでも今の私は、ここに来て良かったと心から思っている。この初心を大切に、2年
目以降の院生生活も楽しんでいきたい。



特に何も起きていないように見えても、雪が解けたあとには家の周囲を一度見直し、損害がないか確認しておくといでしょう。なお、火災保険は「急激かつ偶発の事故」による損害を補償する損害保険であり、経年劣化による破損は補償の対象外となる点にも注意が必要です。

隣家に落雪で損害を与えてしまった場合、自然災害によるものは不可抗力とされ、通常は賠償責任を問われません。しかし、明らかに管理が不十分だったと判断されると、責任を負う可能性があります。万が一に備えて、自動車保険や火災保険に付帯できる個人賠償責任保険を加入しておく安心です。

この文を読んだ方、自分が加入している火災保険を確認しておきましょう。保険証券が手元にありますか。保険期間が終了したままになっていませんか。契約した代理店や保険会社、証券番号、補償の対象が建物なのか家財なのか、あるいはその両方なのか、そして自己負担金の有無などを確かめておきましょう。火災保険は5年以上の長期契約が多いので、大事にしまったままからなくなっている方もいます。もし保険証券が見当たらない場合は、再発行を依頼することもできます。

今冬は積雪が多く、屋根が歪んだり物置が崩れたりするほか、外壁や門、塀が壊れる、落雪によってカーポートやエアコンの室外機が破損したり、雪割れや雪庇の落下によってアンテナが折れたり窓ガラスが割れたりすることなど、さまざまな雪害が発生するおそれがあります。こうした損害を見つけたときは、まず火災保険を契約している保険会社へ連絡し、補償の対象になるか相談してみてください。「保険が使える」と言って修理を勧誘する悪質な業者もいるため、安易に契約しないようにしましょう。

ほけんのお話



北海道協同保険サービス 生協会館店1階

(平日)11:00~17:00 (閉店~土・日・祝・年末年始)

TEL 011-726-0441

FAX 011-746-9065

Eメール hoken.cls@univ.coop

Vol. 46

大学文書館へ 行こう

第27回 「北大と北大生の150年」

北海道大学大学文書館 井上 高聡



『北大と北大生の150年』

タッフが担当したほか、長く「北海道大学の歴史」の講義を開講されている近藤健一郎先生（教育学研究教授）、札幌キャンパスの敷地が北大の所有となる以前の状況にお詳しい谷本晃久先生（文学研究教授）、札幌キャンパスの埋蔵文化財の調査に長年携われて来られた高倉純先生（札幌国際大学教授、一昨年末まで北海道大学埋蔵文化財調査センター所属）に専門分野についてお願いしました。

主人公は北大生

『北大と北大生の150年』の内容の特徴は、北大の百五十年の歴史を通観すると共に、その歴史の中、学生がどんな環境で、どんな活動をし、どんな学生生活を送ったかを取り上げている点です。大学の歴史の中に学生の姿を捉えるのは案外難しい課題です。生き生きと活動する学生の姿は、資料の中にはなかなか現われにくいためです。

『北大と北大生の150年』でも、十分とは言えませんが、いつの時代も北大の主人公であった北大生の姿を追っています。学業の様子、部活動、寮生活、戦争への動員、敗戦直後の困窮、女性の進学、こうした学生の活動の場となったキャンパスの移り変わり、札幌への交通手段の変遷などの皆さんに読んでいただくことを

北海道大学は、前身校札幌農学校が開校した一八七六年を創基と定めています。従って、今年二〇二六年は創基百五十年の年に当たります。九月には創基百五十年記念式典を開催する予定ですし、様々な関連行事も準備が進んでいます。二月のさつぽろ雪まつりには、古河講堂の大雪像が登場しました。四月には、初代教頭クラークが教え子に「Boys, be ambitious」の別れの辞を伝えたことされる北広島市のエスコフィールド北海道で入学式を執り行ないました。これらも記念事業の一環です。

『北大と北大生の150年』刊行

大学文書館も創基百五十年に向けて、なかなか忙しい日々を送っています。五年前に館内

に「北海道大学百五十年史編集室」を設置し、八冊の刊行物の編集を進めています。現在まで、『北海道大学百五十年史』資料編一、二の二冊を刊行しました。そして、この三月、『北大と北大生の150年』を刊行しました。百五十ページほどの手軽に読める書籍です。北海道大学百五十年の歴史を十章に時代区分をして記述しました。各章には、その時代の出来事を概略的に説明したアウトラインを載せています。そして、それぞれの時代の歴史を特徴づけるような出来事や事柄を取り上げたコラム、最近五十年を取り扱う章では詳しい説明が必要な大きな動きを取り上げたトピックを加えました。執筆は普段から大学の歴史的資料を扱っている大学文書館の



敗戦後の食糧調達に奮闘した恵迪寮畜産園芸班の慰労コンパ(1946年)

念頭に作成しています。何十年も前の、あるいは百数十年前の学生に、現在の自身の姿を重ね合わせてみてほしいと思います。

アイヌ民族と共生する大学

もう一つは、アイヌ民族と北大の歴史的な関わりです。近年、北海道大学は、北海道などの北方地域の先住民アイヌ民族と共生していくための様々な取り組みを行なっています。『北大と北大生の150年』では、こうした取り組みの一端、例えば、北大生協の食堂におけるアイヌ伝統食の提供などを紹介しています。また、札幌キャンパスの地中にはアイヌ民族やその先駆けとなる人びとの生活の痕跡が埋蔵文化として眠っていること、札幌キャンパスが北大の敷地となる以前にはアイヌ民族の住居が所在し生活テリト



サクシュコトニ川の川筋に沿って、太古の人びとの生活の痕跡が埋蔵文化として眠っている (2004年)

リーであったこと、一九三〇年代から北大がアイヌ民族を対象とした人類学研究を行なったこと、そのときに収集したアイヌ民族の遺骨等の返還が問題となっていること、北大の植民学研究におけるアイヌ民族認識など、北大に身を置く私たちが知っておくべき歴史的関係性も記述しています。昨今、様々な分野、場面でダイバーシティ（多様性）が強調されています。しかし、そのわりに、実際の社会ではそれを蔑ろにする出来事が目立ちます。私たちが、身近な課題として、先住民アイヌ民族と共生する大学のあり方を考える立場にいるということは、それが重い問題であるだけに、実はたいへん幸いなことも知れませんが、この本が考えるヒントになると良いと思います。『北大と北大生の150年』は、今年度の新入生に配付すると共に、北大生協でも販売します。

北大生協には「学生・院生・留学生・教職員」の4つの組織委員会があります。

北大生協組織委員会報告

学生委員会

■冬の健康企画「輪投げ下戸く酔っ払い輪投げチャレンジ」を行いました！

1月15日に北部ウコトイセ店のイベントスペースで輪投げ下戸く酔っ払い輪投げチャレンジを開催しました！企画の概要としましては泥酔ゴーグルをつけた状態で輪投げを行い得点上位者には景品を配布しました！また共済への加入確認会も同時に行い共済の認知度を高められるよう頑張りました！

■食堂企画「ドンパチ！井物総選挙」を行いました！

1月19日にHBAライラック食堂と中央食堂にてテラスにて「ドンパチ！井物総選挙」を行いました！企画の概要は食堂で提供される井物のうち16種類をピックアップして人気ナンバー1を決める投票企画を行いました！約1000人ほどに投票をしていただき大盛り上がり企画でした！結果は3月中旬に発表しますのぞお楽しみに！

院生委員会

■第2回院生交流会を開催しました！

1月9日(金)に生協会館1階多目的ホールにて、第2回院生交流会を開催しました！前回では企画やメール文に興味を持ってくださった方が多かったので、今回も踏襲し、学部上級生にも枠を広げ交流を行いました。

当日の参加者は院生委員3名、博士課程院生2名、修士課程院生7名、学部生(一)1名の13名で、お酒や食事を楽しみながら、大学院生活の話や卒業後の話題で盛り上がりました。

今回は博士留学生2名も参加してくださり、英語を交えつつ研究内容について交流を行う、刺激的な「院生の集い」になりました。個人的に、院生委員会も新体制への移行中ですが、院生交流会は北大にいろんな院生がいることを気づかせてくれたので、ぜひ続けていきたいと感じました！

4月からは院生委員会主催で院生歓迎会を行う予定です！

修士新1年生、博士新1年生はもちろん、新2年生以降の方もご参加をお待ちしております！



留学生委員会

■クリスマスイベントを開催しました！

生協留学生委員会は、12月15日(月)に北部食堂でクリスマスイベントを実施し、留学生と日本人学生合わせて約30名が参加しました。イベントでは、椅子取りゲームやクリスマスに関するクイズで盛り上がったほか、食事を囲んで歓談を楽しみました。また、委員会のスタッフがサンタクロースやトナカイに仮装し、会場を盛り上げました。

今年度も季節に合わせた様々なイベントを企画する予定です。留学生、日本人学生を問わず、多くの皆様のご参加をお待ちしています。



教職員委員会

■教職員総代会議…12月10日、2月12日はWEBにて、12月9日は理学部、2月10日は工学部にて対面により開催しました。決算報告や、中央食堂・理学部ショップの営業、工学部食堂の運営についてのご意見を頂きました。

■教職員委員会…12月11日、2月12日に定例会議を開催し、きぼうの虹の編集・次年度総代募集について話し合いました。

■「きぼうの虹」…この冊子です。毎回Onionや特集ページなどで、多くの教職員の方にご寄稿をいただいています。

【編集後記】

本稿が読まれる頃、彼の国での戦争は果たしてどのような状況になっているのでしょうか。戦禍に遭われた人々の苦痛を思うと忍びなく、また、この地域での紛争は巡り巡って私たちの暮らしに想像もつかぬ影響を及ぼすのではないかと、心配は尽きません。

さて、「ここから健康を考えると」、長年ご執筆いただいた渡辺誠先生の定年退職に伴い、本号をもって連載を終了することとなりました。かくいう私も今年度で北大を離れる年を迎えます。始まりがあれば終わりがあり、しかし終わりがあるからこそ、新たな始まりがあります。このことから、一日も早く戦争が終わり、再び穏やかな日々が始まることを願ってやみません。